



第 42 回（平成 21 年 10 月 14 日）定例会の研究発表要旨

手稲山口 バッタ塚

星置 加藤利昭 氏

手稲に住んでいる人々が何度となく耳にしている「山口バッタ塚」。しかしかつてバッタの大飛来があり、その「記念碑」であろう以上のことは案外知られていない。

今回加藤さんのきめ細かい解説と詳細な資料により、「山口バッタ塚」の真実が見えてきました。

配布された「手稲山口のバッタ塚に関する調査報告書」 島倉亨次郎著によるとバッタの飛蝗に関しては世界各国にその記録が残されており、北海道では 1880 年（明治 13）— 85 年、当時の十勝、日高、胆振、石狩にトノサマバッタが大発生し、農作物に大打撃を与えた。手稲山口村も 1882、3 年にこの蝗害を被り、収穫は皆無、その対策として国や道がバッタの死骸や卵を買い取り、大浜に近い砂浜に埋めたとあります。



〈飛蝗のメカニズム〉 北海道にはバッタが大発生する素地があった

卵のうは土中近くに埋められた状態のため、通常（25-30cm）にすき返された土地では、孵化した若虫は地表に出るまでに疲弊し、食草までたどり着く前に死滅する。また長雨などで地面が水浸しになると胚は窒息し腐敗する。広大な北海道では地表に産みつけられた卵が耕されることも、水浸しになることもなく大発生の諸条件が整っていた。

また、生息密度が低い時は群飛しないが大密度になった世代では形態が変化し、400-1000km を移動する飛蝗が発生し、草木や農作物に壊滅的な被害をもたらします。

〈トノサマバッタ撲滅〉 をめざして

明治政府は北海道開拓に投じた莫大な労力と国費、移住民の失意を考え、また飛蝗が津軽海峡を越えることを危惧し、世界中の文献から有効な駆除法を模索していたが、結局は「埋める」という原始的な結論に至った。人々は雨と天敵の鳥獣に期待しながら、虫体や卵を集め、計量して買い取ってもらい、溝に埋めた。買い取り価格は若虫 1 升 50 銭、卵のう 1 升 2 円（後に 5 円）、こうして畝の高さ 40-50cm、幅約 2m、長さ約 65m、100 条の山口バッタ塚が生まれ、昭和 53 年、札幌市指定有形文化財（史跡）となりました。1967 年、この地の土を調査したが、すでにバッタ特有の虫体の形骸は顕微鏡でも認められなかった。歳月の経過を感じながらも、報告書の文中に当会会員の平佐さんのお身内の談話があり、歴史はまさしく過去から現在に連鎖し、さらに郷土史が身近に感じられました。

[文責：高木]

「山口村の由来」について

手稲前田 館岡良三 氏

今日の発表者は日本歴史が好きなこともあり、山口村に関わる、関ヶ原の合戦、岩国藩、長州藩の時代などについて詳しく触れ、何か NHK の大河ドラマを思い浮かべながら楽しく聞かせてもらったほどである。また、山口村に入植した当時の「柏村桃作」氏の三代目一郎宅を茂内先生と訪問し、生の話を聞くと言う貴重な体験を試みたことなど、発表要旨は次のとおりです。



1. 山口村の由来

岩国藩は 1871 年 7 月の廃藩置県により、岩国県となった。同年 11 月には山口県と合併している。また、下手稲村に移住した山口県出身者は明治 15 年 12 月 22 日郷里の名を「山口村」と称した。

2. 長州藩の幕末の歩み

1863 年 8 月 18 日の政変、蛤御門の変、四国連合艦隊下関砲撃、長州征伐等の歴史的事件の中心となり幕藩制を廃し、明治の新時代を切り開いた。

3. 岩国藩について

関ヶ原の合戦（1600 年 9 月）の時、岩国藩主の吉川広家は東軍（徳川家康方）が有利として、毛利家の存続を計って内通した。しかし、戦後は毛利本家を取り潰し、吉川広家には 14 万石だったものを 29 万石を与えた。

広家は必死に自分の戦功に代えて毛利家の安泰を哀願し、広家の戦功の領土を毛利家に与えることに成功した。

しかし、毛利家は広家の努力を全く認めず、本家を売った内通者とした。また、独立の藩と認めず形式上は陪臣（家老クラス）と言う扱いで冷遇した。

幕末になり第 12 代当主、吉川経幹^{つねまさ}は毛利宗家と融和強調に努めた。幕末期の動乱の中では懸命に宗家を助けて国事斡旋にも参与した。

4. 柏村桃作氏^{かしわむらとうさく}について

山口村のリーダであった、柏村桃作は、明治 15 年 3 月に入植したが、畑作は不作でバッタの被害等により、生活は大変苦しかった。

しかしながら、開墾に従事しながら「役場村用係」、「郵便脚夫」、「鉄道工夫」になり努力した。また、欠乏の内より、子弟の教育、学校新築の寄付などもした。

大正 3 年には北海道長官より表彰されている。

次回の予定

次回（12 月 9 日）は、会員の研究発表、濱埜静子会員の「開拓村、ボランティア（ガイド）活動をとおして」と鈴木事務局長の「手稲鉦山グループの研究成果中間報告」を予定しております。